東京市中野区江古田四丁目一五五九
圓地文子

ますものは御覧遊ばしましたでしょうか。飾りみじんに腐りきってしまいましたので、多分けしたが矢張機を輝くようでございました。御恵を頂いて有難く存じます。音なり形なりにたとえようもない美しさでございます。御やうに美しいものとなるものの中へ中へとばかり落ちこんで行ってしまって、ちゃうに壁へ頭ばかりぶつけるような人間には、ごまかしと美しいものとを区別する力がなくなってしまいました。今近所の中やで御多さんの連集（美しい話のようと思ってまして見ましたらと豊麗な色彩に抵抗するばかりです。私はうちの男ばかりすぐ家の中の新聞紙に絢爛華麗なるものが物きです。夢立ての踊りをしるる意味が物きです。この俺ちどもどんなみる宝にしりつけて、おしいかの地走を腹一杯に詰めて食べたやうな気がします。こんな豊饒な色彩を四畳半に腹一杯詰めたくなるような人間を考えると、矢張生命の健かさ、豊麗さ、[illegible]を感じたくなります。この俺と盛られたほどの旺盛な生命感を理解する人間にあやかりたいなかなか見つかりません。私のよく知っている男ちどもをおかしいことですが、この一枚の俺と較べてみると、一寸に考えるくらいしかないのです。比較してみるとおかしくなるくらい貧しい者ばかりです。こんなことに心がひかれて行ってくれればよいのですけれど、さぞ行きますまい。今度の俺は仕上げるのにはどうしても自慢かへ行って貰うようになって貰うつもりです。まだ陽の目にあうほどまで本当の心の恵中は出来ません。この男中、五年の歳月をゆくようなゆで者を欲お眠つかせう。

花瓶の牡丹 高らく崩ほをて
甚あくはなり深夏の影ふ
鄙ふ位へ蛇を這へあか閑と
五月の時の ほ[illegible]
雨ち 地を温ほせどあか眠に

風ぐとしるく心の調ひあ
あか眠の夏に寄とゆかてあ
一夜もあふ弦ふあちさ
山ふ蒲ふ本なのみとりあか夏ふ
きみかうを心に笑子を置き（俳句集）